

ネロの血のなしとは言はず花柘榴

藤田湘子

ローマ帝国のネロ帝と言えば、まず初期キリスト教徒の大虐殺と教えられた記憶がある。高校時代から愛用していた『世界史要覧』（文英堂）には、イエス・キリストとネロ帝の解説が左右に並んでいた。

迫害のイメージが強められたのは、ポーランドのノーベル賞作家シエンキエーヴィチ原作のハリウッド映画『クオ ヴァーデイス Quo Vadis』の影響もあつたかもしれない。

湘子が結社主宰者として暴君であつたとは思えない。また、家庭で暴君であつたはずもないが、秋櫻子の考えを入れ、妻や娘が俳句に関わるのは嫌つていたようだ。赤い血の滴るような石榴の実ではなく、初夏の石榴の花の取り合わせにより救われる思いがする。

1686年（558.06.27作）第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩